令和5年度 EDU-Port シンポジウム開催報告

令和 6 年 3 月 12 日（火)、EDU-Port シンポジウム 「今後の国際教育協力への期待」を開催しました。

EDU-Portシンポジウムは、関係省庁、政府系機関、大学、教育事業者、NGO/NPO等の教育関係者が一堂に会し、今年度の事業の成果及び今後の方向性を確認することを目的として開催するものです。 7 回目となる今回のシンポジウムでは、平和で安定し繁栄した国際社会の構築のために開発途上国への協力とともに、ASEAN、グローバルサウス諸国との連携強化が求められる中で、我が国の国際教育協力も変化する時代の要請に応えることが一層重要になっている状況を踏まえて、様々なステークホルダーがこれまでの国際教育協力の具体的取組や好事例を共有し、今後の国際教育協力の在り方やEDU-Port事業への期待等について議論しました。

シンポジウムは対面とオンラインのハイブリッドで開催され、国内および海外から約300名の方がご参加くださいました。

（以下の各登壇者の役職等は、シンポジウム開催時点のものです。）

■開会挨拶

北山 浩士　＜文部科学省大臣官房国際課長＞

（概要）ASEAN 諸国やグローバルサウス国との連携強化の議論が進められる中で、我が国の国際教育協力も時代の要請に応えていくことが一層重要になっている。政府における国際教育協力についてはJICAが中心になり様々な取組が進められているが、文部科学省が推進するEDU-Port事業も重要な役割を果たしている。その効果をさらに上げるため、国内外での認知度を高め、日本の教育の国際化により一層貢献するように誘導する。また、これまでの成果・知見・人脈を活用するとともに、JICAやJETRO等の関係機関との連携強化を図りたい。本日のシンポジウムでは、様々な視点をお持ちの有識者の皆様から大所高所からの御意見や事業への期待をお聞かせいただくとともに、取組の好事例、現場からの意見を踏まえた議論を通じて、EDU-Portの今後の方向性を含む今後の国際教育協力の在り方について考えて行く機会になることを期待する。

■【講演】
「JICAの教育協力とEDU-Portへの期待」
亀井 温子氏　＜国際協力機構（JICA）人間開発部長＞

（概要）1. JICAの概要と教育開発協力、2. EDU-PortとJICA事業の連携事例、3. EDU-Portへの期待と連携可能性、について述べる。JICAの協力方針グローバルアジェンダ「教育」では、「一人ひとりが生き生きと輝く、質の高い教育を」を目標に掲げている。EDU-Portとの連携事例としては、パプアニューギニアでの教科書開発や、マラウィでの福井型教育の推進などがある。EDU-PortにはI. SDGsゴール4を達成するためのソリューションの提供（日本が持つ教育開発経験と優れた教育コンテンツ）、II.関係者間の情報共有・交流の場づくり（パートナーシップ）、III.海外における教育協力経験を日本に還元する場づくりを期待している。その上で連携を通じて、SDGsゴール4の達成、日本の教育に対する高い評価とビジネスの成功、日本の教育の国際化とさらなる発展につながることを期待している。

■【EDU-Portニポン公募事業活動報告・成果事例①】
「エジプトにおける非認知能力の育成に向けた特別活動の国際化と質保証」
京免 徹雄氏　＜筑波大学 人間系 准教授＞

（概要）本研究では、エジプトの小学校での特別活動の現地化の実態を調査し、非認知能力に与える影響を明らかにする。調査結果は国内に還元し、日本の教育の国際化を目指している。プロジェクトAではTokkatsuディプロマの共同開発を、プロジェクトBでは小学校における非認知能力育成の効果検証を行っている。また、プロジェクトCとして特別活動の現地化に関するインタビュー調査、プロジェクトDとしてカイロ日本人学校とエジプト日本学校との交流活動も実施した。本研究により、相手国の文化（価値観）と日本型教育との接点を探り、日本型の負の側面にも注目し、「逆輸入」による学び合いを行う。また、行政・実践者・研究者が協働して教育の海外展開を進める。こうした取組が、国際教育協力の在り方に示唆を与えるものとなることを期待する。

■【EDU-Portニッポン公募事業活動報告・成果事例②】
「日本型音楽教育の海外展開による「学び」と日本の教育への還元」
大竹 悠司氏　＜ヤマハ株式会社 楽器・音響営業本部 AP営業統括部 音楽普及グループ リーダー＞

（概要）ヤマハのスクールプロジェクトとは、事業活動を通じて音楽文化のサステナビリティへの貢献を目指す活動であり、対象国の課題に対してパッケージ型ソリューションを提案し、各国の事情に応じてカスタマイズしながら音楽・器楽を通した教育の導入を支援している。これまでにベトナム、エジプト、ブラジル、インド、コロンビアの５カ国でEDU-Portニッポンの事業を実施している。世界の教育の潮流である「非認知能力」を育むには協働的・創造的な活動が好まれると言われており、ヤマハはそうした活動を取り入れやすい音楽での事業参画を通じて、日本型教育の海外展開に貢献している。相手国での非認知能力調査により日本の音楽教育の価値が再確認されるとともに、デジタル教材の活用は日本でも直面する教員負担軽減への提案につながる。また、相手国と日本の学生の音楽を通じた交流により、異文化交流・理解も進めている。

■【EDU-Portニッポン公募事業活動報告・成果事例③】
「カンボジアでの学校保健室体制全国展開とデータ管理現地実装まで」
清水 裕子氏　＜香川大学医学部 医学系研究科 教授＞

（概要）香川大学では平成28年からカンボジアで、文部科学省・JICA・厚生労働省・徳島大学と連携して、衛生教育および学校保健室体制モデルの進展事業を進めてきた。EDU-Portニッポンでは令和３年度の調査研究事業として、「香川大学衛生教育および学校保健室体制モデルの進展事業」を実施した。令和３年９月には現地政府から全国に学校保健室の政令が発出され、香川大学モデルをカンボジア型に改変した保健室が幼稚園から大学まで徐々に開設されつつある。現場では政府職員による学校保健室の整備や身体検査の実施などの自走活動が始まっている。相手国政府の政策的意図に沿って、パートナーとの信頼関係に基づいて取組を進めたことが成果につながった。途上国との国際教育協力においては、長期目標（現地政府の政策との妥当性）と事業アウトカム（評価項目）を明確にする必要がある。

■パネルディスカッション「今後の国際教育協力への期待」

＜パネリスト＞
東京大学公共政策大学院 教授　鈴木寛氏
東京大学大学院教育学研究科 教授　北村友人氏
講演者・発表者（４名）

「今後の国際教育協力への期待」をテーマに、EDU-Port ニッポンに深く関わって来られた有識者２名と、講演者及び公募事業活動報告・成果事例の発表者3名をパネリストに迎え、ご議論いただきました。 講演及び発表への講評の後、以下のような議論が行われました。

（概要）
講演及び発表の総括

・コロナ禍の苦難が各プロジェクトの本質的な活動や考察に繋がったように感じる。

・日本の明治時代以降の教育の歴史はアングロサクソン系の教育とは大きく異なるため、その軌跡を広く国際的に普及することは重要だと認識している。令和５年12月に発表されたPISA2022の結果では、日本の教育の特徴として子どもたちの学校へのBelonging（一体感、帰属意識）が高いことが明らかになった。日本が文化として重要視してきた、教科教育に限らない学びの共同体としての学校づくりの成果が表れてきているのではないか。

今後のEDU-Portニッポンへの提言

・プロジェクトを実施する中で、他の分野での課題を見つけることができた。こうした広がりを生み出せる仕組み作りを進めてほしい。

・在外日本国大使館でもEDU-Portニッポンの知名度は上がってきていると実感している。海外における日本のプレゼンスを高めるため、今後も国際教育見本市への企業との共同出展などを検討してほしい。

・双方向の学びという視点が必要である。日本型教育は未完成であるという認識であり、相手国からも学び、常に更新し続けていくことに可能性があると考えている。相手国での学びを日本で実践し、その結果を相手国に戻すことを計画している。

・日本の教育レベルを上げるため、国内の教育への還元に向けた財政的なスキームの多様化が求められる。また、民間企業等との連携のさらなる活発化を期待する。

・EDU-Portニッポンで双方向の開かれたプラットフォームが出来たことは素晴らしい。

・令和５年６月に発表された新たな教育振興基本計画の中で「日本発ウェルビーイング」が二本柱[1]の一つに掲げられた。OECDも「教育2040」を策定中で、そこでは「教育は何のた

[1] 令和５年６月に発表された新しい教育振興基本計画では、「2040 年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を次期計画のコンセプトとしている。

めにあるのか」をもう一度議論し直そうとしている。幸福度の測定に用いられている「キャントリルの梯子」を上ることが良いことで、そのために教育があるという欧米主導のウェルビーイングの流れに一矢報いたい。日本の学校には梯子を上るだけではなく、同調圧力に留意しつつ、協調的な要素を持った良いコミュニティーとしての存在意義があり、それが冒頭にも述べた日本の子供たちのBelongingの高さにもつながっている。

■ポスターセッション

シンポジウム終了後、会場では、今年度事業を実施中のEDU-Portニッポン公募事業実施機関のうち17機関によるポスターセッションが行われました。各事業のポスターの前では、担当者との会話に花を咲かせる参加者の姿が見られ、会場は大いに盛り上がりました。

事後アンケートでは、「産官学の取組が総合的に理解できた」「昨年度のシンポジウムより具体的に日本型教育が理解できる発表内容だった」「EDU-Portニッポンの今後の国際教育協力への貢献についての議論が聞けた」といった声が寄せられました。

以 上